

家族によるしつけを困難にしている要因 社会集団を必要とするしつけ

千葉 聡子*

Factors Contributing to Difficulties in Family Discipline: The Social Group's Needed Contributions

Akiko Chiba

抄 録

現在生じている教育問題の原因の一つとして、家族がしつけを充分に行っていないことがあげられるが、家族の教育力の有無や回復の方法を論じる前に必要なことは、家族には本来しつけを行う力があるという認識が妥当であるかを確認することと、しつけを行うことを困難にしている要因を探ることであると考えられる。本稿では、しつけの担い手と内容が変化してきたことを確認した上で、現在しつけを行うことが困難になっている理由を、家族の機能の変化、学校教育を支える教育理念の変化、さらに重要な集団の喪失という点に求め、考察した。

1. 問題：家庭の教育力低下とその回復という発想

教育には若い世代を社会成員に育て、そのことによって社会を維持・再編していく機能がある。特に近代社会は社会生活を反省的に見、改良の視点から新たに組織する傾向を強くもつため、社会を維持・再編するという教育の機能は、変化の激しい社会にあってその重要性を増しているし、社会に問題が生じればそれが常に教育問題としてとらえられる可能性が高くなっている。従って、教育や学校へ対する批判や問題の指摘は恒常的に存在すると考えられるが、その認識を誤れば教育のみならず社会も進むべき方向を見失うため、教育の何が問題とされているか、また問題が生じている原因の分析がどのようになされているかについて、私たちは十分に注意を払う必要がある。

さて、最近の教育にかかわる問題をめぐっては、不登校の増加や小学校で生じ始めた学級崩壊、また学力低下問題など、学校の機能や存在そのものを問うような事態が指摘されている。またもう一方では、少年非行が戦後第4のピークを迎えるのではないかという危惧や、援助交際や親父狩りといった大人の理解の域を越える少年犯罪がクローズアップされ、家庭や地域の教育力の回復を求める声もあがってきている。これらの状況は、明治期にスタートした近代学校教育制度が拡大の限界を迎え、学校や教育全般が新たな目標や社会的役割を再構築する必要が生じているという重大な課題が明確になってきたことを示している。また学校の持つパワーの相対的低下に伴い、地域社会、家庭、また学校以外の教育機関には分担するべき教育的機能が存在することを確認する動きが生じてきたことをあらわしていると考えられる。

こうした中、学校教育については制度の硬

*ちば あきこ 文教大学教育学部

直化が問題発生の原因とされ、自由化、多様化を新たに目指すべき方向として改革案が次々と提示され実行に移されている。また家庭や地域社会に対しては、しつけをはじめ本来家庭や地域社会に存在していたはずの教育力の低下が問題の背景にあるとされ、これらの力を「回復」するという戦略がとられている。

この家庭や地域の教育力低下とその回復という認識は、1997年に少年による凶悪犯罪が発生した後、文部大臣が「幼児期からの心の教育の在り方」について中央教育審議会に諮問をし、それを受けて1998年6月に提出された答申『新しい時代を拓く心を育てるために - 次世代を育てる心を失う危機 - 』にはっきりと見て取ることができる。

この答申では、子どもたちの規範意識や人間関係形成力が弱まってきており、心をめぐる問題が広範にわたるという現状認識のもと、家庭、地域、学校、また社会全体に対し、それぞれにその在り方を見直し、子どもたちのよりよい成長を目指した新たな取り組みを行うこと求めており、中教審としては初めて家庭教育についても踏み込んだ具体的提言を行っている。「過保護や過干渉、育児不安の広がりやしつけへの自信の喪失など、今日の家庭における教育の問題は座視できない状況になっているため、家庭教育の在り方について多くの提言を行っている」と冒頭で述べているように、文部省が家庭教育に対しても注文をつけ始めた答申の姿勢には注目すべきものがある。しかしその内容には目新しいものはなく、注目すべき点はむしろ、答申本文中に明記されているように、問題解決のための提言内容を「どの家庭でもしつけに当たって考えるべき基本的な事項であり、当然のことであるかもしれない」ととらえ、問題解決の方法を「しかしそれぞれ実行するには大きな努力を要することである。また、すべてにわたって完全に実行することを求めるものではなく、一人一人の親が家庭を見つめ直し、こ

の提言を手がかりとして、できるところから取り組んでいってほしい」と提示しているところにある。

つまりこの答申では、第一に、規範意識の低下によって現在生じている問題は家庭でのしつけが充分なされていないことに原因の一つがあり、第二に、家庭や地域、特に家庭には本来しつけを行う力が備わっており、現在弱まっている力を回復することは困難が伴うかもしれないが可能である、と家庭や地域の状況をとらえているのである。従って答申の大部分は、「正義感・倫理観や思いやりの心など豊かな人間性をはぐくもう」、「思いやりのある明るい円満な家庭を作ろう」といったスローガンのような、ある意味で非常に具体的だが、ある意味で非常に抽象的で理想的な提言で占められている⁽¹⁾。つまりこの答申には、「本当に現在の家庭にしつけを行う力があるのか」、また「なぜその力は弱まっているのか」といった問題の生じた背景の分析を停止し、問題を啓発や啓蒙によって乗り越えようという発想がある⁽²⁾。

確かに、一般に今の子どもには十分なしつけがなされていない、また家庭はしつけを充分に行っていないということが常識となって存在している⁽³⁾。しかし、文部省が示した提言内容は実行可能であり、その結果しつけが充分に行えるという確証もない。繰り返しになるが、それはこの答申が「なぜ」という質問に十分に答えていないからである。問題発生 of 仕組みがわからなければ、問題は解決にいたらないし、行動にも自信が持てないのである。

そこで本稿では、家庭や地域がもつしつけを行う力を回復させることを考える以前に検討しておく必要がある、家族がしつけを行うことが難しくなっている理由を探っていくこととしたい。そこでまず、本来家庭にはしつけを行う力がある、という考え方を検討することからはじめよう。

2. しつけと家族の関係

(1) しつけとは何か

さて、しつけと家族の関係を問題とするためには、しつけの内容を明らかにしておく必要がある。しつけに求められている教育機能とは具体的に何を指すのであろうか。日常的に使用する言葉であるため使用する個人や文脈で意味する内容が異なってくることも考えられるが、辞典では以下のように定義されている。

まず社会学小辞典では、しつけは「社会化の一つの形態であり、日常生活における基本的な習慣・態度・行動様式などを、主として子どもに体得させること。その根底には一定の価値規範が含まれているが、しつけという場合、力点は行動の形式的な規律面に置かれている」と定義される(濱嶋 1997, 233頁)。また、山村賢明は『新教育社会学辞典』においてしつけを「一般に社会化といわれている事象のうち、特に日常生活における基本的な行動様式や習慣の型を身につけさせることを意味する日常用語。(中略)もともとこの言葉は、シツケ系とか作物をシツケルなどというように、一定の型にはまるように矯めたり、作りつけることを意味していたといえる」と規定している。これらのしつけの定義は、ほぼ同じ内容になっており、しつけとは、日常生活における基本的な行動様式や習慣を行動のレベルで身につけさせることを意味しているといえる。

また山村は定義に続いて、現代のしつけにも持続している日本的しつけの特徴を示している。第一の特徴は、実際の行動という形の外に現れる型や形の習得を重視するものであり、外面ができることで内面は自ずからできあがるという思想があるという点である。従ってしつけにおいては型に合っているかどうか最も重要な問題であり、しつけられる側には型に合わせる努力や同調が何より要求されることになる。第二は、しつけは言葉によって論理的に明示されるものではなく、実際の生活の場の中で、自得され、体得されるべ

きものだと考えられていたため、経験の積み重ねの中から体で覚え、会得していくという方法が取られた、ということである。また、第三に、伝統的な日本のしつけの注目すべき点として、子どもに対する親以外のものによるしつけが重視されていたことがあげられている。かつては、地域社会の中には様々な仮親の制度があり、各種の通過儀礼が行われ、年齢階梯組織への参加があって、他人によるしつけが重層的に行われ、親以外の他者がしつけにかかわることによって、子どものしつけに迷う親では行えないようなしつけが有効に行われていたのである(山村 1986)。

この山村のあげている日本のしつけの特徴から、私たちはしつけについての認識を新たにすることになる。第一点は、「しつけとは親が責任を持ち中心となって行う」という現在の私たちのしつけについての認識は決して普遍的なものではないという点であり、もう一点は、しつけは型として完成した行動パターンを、言葉によってではなく経験を通して体得していくものであった、という二点である。

それでは一点目あげた、親以外のものによるしつけが重視されいた状態から、しつけは親が行うものという現在の私たちのしつけの認識への変化が、どのような過程を経て生じてきたかをみておくことにしよう。

(2) しつけの担い手の変化

広田照幸は、最近よく言われる「家庭の教育力は低下した」という言説に疑問を呈し、家庭の教育力が低下しているというイメージとはまったく逆に、現在の親たちは以前よりも熱心に子どもの教育に取り組まざるを得なくなっている状況を、歴史的観点から、学校の位置付けに注目して論じている。この中で広田は、日本では大正期に学校教育の定着と共に雇用者を代表とする新中間層によって構成される「教育する家族」が登場し、この「教育する家族」が家族のあるべきモデル

になっていく中で、しつけの在り方が変化していくことを示している。

明治初期に導入された学校制度が根付いていく以前の庶民生活において、しつけや人間形成の機能を果たしていたのは、家族というよりは家族以外の者による村の大きなネットワークであり、しつけは村で共通したルールを遊びや手伝いや行事を通して、無意図的に自然に体得、自得する形でなされていた。この時代、子どものしつけは親の責任だという観念は希薄で、むしろ親は、子どものしつけに対しては無関心といってもよい状況であった。一方、親の関心は子どもそのものではなく労働・生産問題にあり、親は家の存続にかかわる家業の技能伝達を意味する「労働のしつけ」を子どもに厳しく行っていた。つまり、伝統的家族にとって子どもは労働力として大きな意味を持っていたのであり、家族が行うしつけは、専ら労働力として子どもを一人前にするためのものだったのである。

しかし大正期に入り、都市を中心に比較的裕福で教養のある専門職や俸給生活者などの新中間層が出現し、家庭でのしつけや教育に変化が生じ始める。彼らは地域とのかかわりが極めて薄く、地域や親族のネットワークに人間形成機能をゆだねずに、性別役割分業を前提に特に母親が子どもの意図的教育に責任を持つという意識をもっていた。また彼らは、学歴が子どもの将来にとって非常に重要であることを自覚した新しい階層であり、学力や進学に強い関心を払っていた。この新中間層が信頼を寄せ始めた学校は、知識の伝達だけでなく、「学校は人間を作るところ」として生活規律を重視する場であり、新中間層が目標とするしつけや人間形成の理想は、学校教育が掲げた内容へと変化していくことになる。こうした新中間層に見られる教育への強い関心と新しい教育観は、戦後、高度経済成長と共に雇用者が増大しそれと並行して学校教育の拡大が進み、他方で地域共同体の解体と家

業継承が終焉に近づくにつれて徐々に一般化し、しつけの担い手として家庭と学校が強調されるようになってくる。

こうしたしつけの担い手についての認識もさらに変化をみせることになる。1970年代後半に入り、高校全入に象徴されるように学校は誰もが行くところになり、また様々な教育問題が発生する場として学校が取り上げられることが増えるなど、学校へ行くことの意味や学校に期待する内容が変容していく。こうして、親の高学歴化も手伝い、親は学校の在り方に全面的信頼を寄せる状態から、学校への不信や要求を持ち、利用する教育機関を吟味し選択していく存在へと変化していく。そしてこの変化は現在更に進んでいる。親は、伝統的社会においてしつけにはほとんど無関心であった存在から、子どもに対する教育的責任を強く感じ、教育的配慮に満ち、しかも学校や教師にあまり期待もしない存在へと大きく変化していったのである。

以上のように、広田はしつけの変化を、家族、地域共同体、学校、また労働形態の変化との関係からとらえ、「都市化や学歴主義によって家族の教育力が低下し、しつけの学校依存の傾向が強まっている」というイメージとは反対に、親は以前よりも熱心にわが子の教育やしつけに取り組むようになってきているし、取り組まざるを得なくなってきたと結論する。また、しつけの担い手が学校と家族に変化したことの背景には、子どもたちが一人前の労働力になっていくためには、学校という抽象的知識を伝達する場を経由する必要が生じてきたことがあると述べている（広田 1999）。

さて、しかし最初にも書いたように、私たちのしつけについての認識は「家族が充分にしつけを行っている」という状況認識とは大きく異なるし、また文部省が各家庭にしつけの具体的な在り方についての冊子を配るような事態が事実として生じているのである。問題は、家族が教育力を失っていないとしても、子どものしつ

けに対して、不安や不満があり自信を持って行えない点にあるのではないだろうか。

柴野昌山が指摘するように、しつけとは、本来私たち大人にとっては、子どもや青少年との相互作用を行うに際し意識するしないにかかわらず社会的行為として行っているものであり、個々の具体的な行動様式や生活習慣を習得させることが目的なしつけ行為であると認識することはないような日常性、自明性を備えた行動といえる。しつけは大人の一般的な役割行為の中に潜入しており、その行為は反省的自覚によってのみ私たちの意識にあがってくるものなのである（柴野 1989 a, 5 頁）。従って、現在私たちがこの自明の行為であるしつけについて注目していること自体が、しつけに何か変化や問題が生じていることを意味していると考えられる。また、しつけが反省的自覚によってのみ私たちの意識にあがってくるのであるとすれば、しつけが実際に有効に行われているという認識も、周囲にしつけが充分行われていない状況が生じてはじめて相対的に浮かび上がってくることになる。広田が確認したもう一つの事実は、家族のしつけ機能は普遍性を備えているわけではないということであった。やはり現在、家族のしつけをめぐる状況には問題とすべき点があるといえるのではないだろうか。そこで「家族にしつけを行う力があるのか」という形で家族としつけの関係を問題にするのではなく、少し問題をずらし「しつけを行うことが難しくなっている」という点から現在の家族に期待されている家族のしつけ機能について考えていきたい。

3. しつけを難しくしている要因は何か

(1) 情緒的安定関係を求める家族

そこで次に、「しつけを行うことが難しい」という認識が生じていることについて、まず家族の果たしている機能の変化に注目して考えていこう。

一般に家族社会学においては、家族を「夫婦・親子・きょうだいなどの少数の近親者を主要な成員とし、成員相互の深い感情的かわりあい結ばれた、幸福追及の集団」と定義する（森岡 1997, 3 頁）が、この定義は、家族という集団がどのような社会的役割を果たしているのかという点について、あまり多くを語っていないように思われる。その理由として、家族はこれまで多様な形態を示してきており、その多様性を集約する定義が非常に難しいことがあげられるが、それ以上に、産業化の進展した社会においては家族の小規模化、家族機能の外部化が進み、家族が果たすべき機能が縮小したことをあげることができる。近代以前の家族は、生産機能をはじめとする教育・保護・宗教・娯楽・地位付与・愛情等の機能を有していたが、近代化とともに、愛情以外の六つの機能は企業、学校、政府などの専門的機関に吸収され、その結果、現代家族の主要機能は、子どもの第一次的社会化と成人パーソナリティの安定化の二つにほぼ集約されたと考えられる。しかしこの状況は、家族機能が縮小したととらえるよりも、愛情や情緒的側面の安定や満足という、非常に微妙で不安定で困難な役割遂行が強調されるようになったというべきなのかもしれない。

また近代社会になり、子どもの意味は家業を継ぎ、労働力として現在と将来の生活保障の役割を果たしてくれる経済的要素が強い「投資財」から、育てる楽しみを与えてくれると共によく育てることが親の名誉となって返ってくる「名誉財」へと変化していることが指摘されている（山田 1997, 84-85 頁）。

日本においては、戦後の高度経済成長期以降「名誉財」としての子ども意味が強まったといつてよい。産業構造の変化により、もはや子どもは労働力としては期待されないし、親も子どもの労働に依存しなくても生活していくことが可能になったのである。家族のもつ子ども養育機能は現在でも重要な機能である

が、何のために子どもを育てるのか問われたときに、「老後の面倒を見てもらうため」と答えるのではなく、「子どもを育てること自体に意味があり、それが楽しい」と答える親子関係が広く形成されつつある。

こうして家族の基盤となる家族内の人間関係は、家族員の情緒的安定を充足させることに主要な関心を寄せることになるし、子どもの意味も情緒的安定を前提として成立するものへと変化している。この家族員の情的安定という現代家族の機能充足の課題は、子どものしつけにどのような影響を与えるのだろうか。

イギリスの社会学者ギデンズは、近代社会の最も顕著な特徴の一つとして「徹底した再帰性」をあげる。「近代の社会生活の有す再帰性は、社会に実際の営みが、まさしくその営みに関して新たに得た情報によってつねに吟味、改善され、その結果、その営み自体の特性を本質的に変えていくという事実に見出される」(Giddens 訳書 1993, 53頁)とあるように、ギデンズは伝統文化がしきたりをそれが伝承されてきたものであるという理由だけで是認するようなことは近代社会においてはできないと指摘し、社会の現実の営みはその営みについて得た知識に照らして不断に修正されていく、この点に近代の諸制度の特徴を見出している。

またギデンズは、再帰性と共に近代を語るうえで重要な概念として「抽象的システム」をあげその発達について述べている。近代社会の制度は私たちを目の前の特定の脈絡から解放し、関係を持つ時間と空間を大幅に拡大させた(「脱埋め込み化」)。この関係の拡大は「顔の見えない」人たちとの関係をより重要なものとして生活することを意味するが、この顔の見えない人たちとの結びつきを可能にするものが、象徴的通標と専門家システムにたいする信頼の発達であり、ギデンズはこの象徴的通標と専門家システムを「抽象的システム」と呼ぶ⁽⁴⁾。この抽象的システムは、

具体的な人間への信頼や個人的に形成する人間関係を基本として成立するものではなく、非人格に対する信頼を前提としている。また、この抽象的システムの発達には、一方で関係の範囲を無限に拡大したが、他方で一定の場所に緊密な関係性が埋め込まれている共同体や親族関係を脱埋め込み化により崩壊させていく。

こうした近代社会の特徴は、今問題としている家族にも及ぶことになる。ギデンズは、近代社会での親密な関係について、以下のように述べている。「人格レベルでの信頼は、当事者たちが「取り組む」べき企てとなり、<相手に心を開くこと>を要求する。かりに信頼が確固とした規範という決まりによって統制できない場合には、信頼は<かち取って>いかなければならず、従って、信頼をかち取るための手段は、実証可能な誠意や率直さである。現在その言葉が担っている意味での「関係性」にたいしてわれわれがいただく独特な関心は、こうした現象のあらわれである。関係性とは、信頼に基づいたきずなであり、その場合、信頼は、所与のものではなく、働きかけるものであり、又、そうした働きかけは<相互の自己開示過程>を意味しているのである」(Giddens 訳書 1993, 151頁)。また「性愛関係は、段階的に進展する相互発見を必然的にともなうが、そうした相互発見の進展では、愛情をいただいた人間の側の自己実現の過程は、愛する相手との親密な関係性の増大と同じくらい重要な経験となっていく。したがって、人格的信頼は、自己探求の過程をとおして確立していかなければならない。自分自身の発見は、モダニティの有す再帰性と直接結びついた達成課題となるのである」(Giddens 訳書 1993, 152頁)。

引用が長くなったが、ギデンズが強調するのは、前近代社会の家族関係においては伝統的に形成され自明のものとされていた信頼関係を、現代の家族は自らの手で形成しなければならなくなったということである。従って、

家族が果たすべき重要な機能である家族員の情緒的安定も、その遂行のためにはまず基盤となる信頼関係を作り出すところからはじめなければならない。しかもこの獲得した信頼関係は、近代社会の中では、常にその関係を見直し新たに作り変えていくという再帰性の原則から免れることができない。家族員はそれぞれ自己のアイデンティティを追及する過程として自己を開示し、他の家族員それぞれのアイデンティティのあり方を調整することを日常的に行いながら信頼関係を形成していかなければならなくなった⁽⁵⁾。

このような現代家族の構造を前提とするならば、しつけを行う親はしつけを行う以前に、信頼関係や情緒的な安定を確保しうる良好な関係を子どもと結んでいくことにエネルギーを費やす必要がある。果たしてこのような情緒を軸に関係を作り続け、問い続ける関係性の中で、「型の教え込み」ともいえる統制面を強調するしつけを行っていくことは可能なのだろうか。しかも、子どもが将来の生活保障という手段的意味を持つ「投資財」からコンサマトリー的要素をより強めた「名譽財」へと変化しているとなればなおさらのこと、しつけ行為は無意識に行う行為から「何のためにそれを行うのか」を問いつつ行う行為へと変化していても不思議ではない。以上のように、家族機能の変化は私たちがしつけを行うことを困難にする状況をもたらしている。

(2) 児童中心主義の影響

さらにもう一点しつけを難しくしている要因として、子どもと大人の間を媒介する教育や社会化を貫く理念の問題をあげたい。児童中心主義のしつけへの影響である。

児童中心主義の教育理念は、子どもを大人への過渡的準備期間にある存在と考えるのではなく、それ自体固有の自立的主体とみなし、外部からの注入を排して、子どもの内発的可能性に期待をかけようとするものである。こ

のような立場は、暗記と試験を中心とする子どもの受動的な学習に依拠する伝統的教育方法を批判して生まれてきたもので、新たな基本的視点として現代の教育を考える上で非常に大きな位置を占めている。特に現代の就学前教育や保育は、児童中心主義の教育思想を基調にして展開されてきており、いま問題としているしつけにもこの児童中心主義は大きく影響している。

柴野は、この児童中心主義によるしつけとバーンステインの示した「見えない教育方法」の類似性を指摘した上で、児童中心主義によるしつけの特徴を以下のようにまとめている。第一に、親や教師のコントロールは明示的ではなく暗示的である（暗示的統制）。第二に、親や教師が一応のしつけ状況をアレンジするが、子どもは其中で何を選択するか、いかに行動するかに関して選択の自由がある（自己制御）。第三に、かつては強調された特定の技能の伝達や習得はあまり強調されず、結果よりもプロセスが重視される。従って何を伝達するか、何を習得すべきかの目標とその目安が失われ、情緒本位の漠然としたしつけ状況が生まれる（型の喪失）。第四に、しつけはしつけ目標にかかわるパターン伝達とその達成を重視するものであるが、このパフォーマンスを評価する基準は、多様かつあいまいになる。従ってしつけの評価基準は、個別的、状況的になりやすい（基準の解体）。従って、しつけ手は、児童中心主義、個人志向的なしつけを目指しながら、実際の行為場面において準拠すべきしつけの枠組みを見出すことができず不安な心理状況に置かれることになってしまう（柴野 1989 b, 38頁）。

この特徴からわかるように、児童中心主義によるしつけは、これまでのしつけのあり方を大きく変えるものであると同時に、子どもの側に大幅な自由裁量を認めることから、しつけ手に混乱と不安をもたらすものであることがわかる。

しかしこの児童中心主義の考え方は、就学

前の教育場面だけでなく、さらにその後の学校教育の現場においても重要な教育理念となりつつある。学校教育は平等と効率化を基本に制度の拡大を進めてきたが、学校教育の拡大の終了と共に、これまでの方針は画一化や受験競争の加熱をもたらしたとして批判されることになる。その後、臨時教育審議会の答申を契機に教育行政は自由化・多様化の方向へと方向転換していくことになるが、この方向転換は、教育を受けるサイドにとっては「個性重視の教育」「選択の自由」「主体性の尊重」といった形で示されることになる。この「個性重視の教育」や「選択の自由」、また「主体性の尊重」の内容をここで論じる余裕はないが、教育現場での重要なキーワードとなった個性や選択、主体性は、暗記と試験を中心とする子どもの受動的な学習に依拠する伝統的教育方法を批判して生まれた子どもの多様性と大幅な自由裁量を許容する児童中心主義の教育理念と共通する点が非常に多いものといえよう。学校教育が方向転換を求められる現状は、すなわち、児童中心主義を就学前の子どもだけでなく、その後の学校で学ぶ子どもたちにとっても重要な教育理念として採用していくことを意味しているといえよう。

この変化は家族や学校によるしつけに何をもちたらずのであろうか。個性や選択、主体性をキーワードにした教育が実際の学校の現場でどのように実現されていくか、またその評価は今後の実践を待つべきことであるが、型を教え込むものとしてのしつけは、批判の対象とされているこれまでの詰め込み型の教育や画一的な教育と比べ、この児童中心主義の教育とより親和性が弱いといえる。子どもにしつけを行っていくことを困難にする環境を学校教育の現場に発見することができるのである。

私たちは、しつけ場面における親の混乱や自信のなさを問題視し、この状況を家族の教育力の低下として理解してきたが、問題は親のみ言及される性質のものではないことが

わかってきた。仮に親がしつけを行う力をもっていたとしても、それを単純に行わせない人間関係が家族の中核にあり、子どもが生活する集団である学校はしつけを行う方向とは逆の子どもの主体性や選択を重視する方向で変化しているといえる。親の背後に広がる要因に注意を払う必要がある。

4. 集団を必要とするしつけ

(1) 学校への不信と集団を喪失する子ども

最後にもう一つ、しつけを難しくしている要因をあげたいが、その前にこれまでの議論をまとめておこう。現在の教育問題の一角を占める家庭の教育力低下という認識の背景には、家族には子どものしつけを行う責任があるという常識が存在する。しかしこれまでみてきたように、しつけの担い手は時代と共に変化し、家庭が行ってきたしつけの内容にも変化が生じているため、単純に家族がしつけとして認識される行為を専ら行ってきたとはいえないことが示された。ここでしつけの中心的担い手と家族の行ってきたしつけの内容の変化をもう一度確認しておこう。まずしつけの担い手は、共同体が中心となっていた状態から、家族と学校へ、さらに家族を中心としたものへと変化してきている。また家族が行うしつけの内容は、地域共同体での生活を基礎に労働力として子どもを一人前の人間に仕立てていくものから、学校が価値を置く生活規律の在り方や教育理想を家庭においても追求するしつけへと変化した。

ところで、しつけには時代と共に変化した面だけでなく、変わらない面があるし、担い手が変わっても共通する面がもちろんある。それは、当然のことであるがこれまではしつけを行ってきたということである。しつけの定義をもう一度思い出ししてみると、しつけとは、社会化の一部を形成するものであり、社会化の中でも特に日常生活に必要な行動様式や習慣を身につけるものであった。社会化と

は、簡単に言ってしまうと、個人が所属する社会や集団に適応しメンバーとなっていく過程であるが、このようにしつけを成員性の獲得過程の一部ととらえるならば、いずれの時代においても私たちは子どもを社会や集団の一員とすることを目的にしつけを行ってきたといえる。この点を逆の方向から見れば、しつけを行っていくためには、しつけによってメンバーとなっていく具体的な集団が存在し、その集団がしつけを行う大人としつけられる子どもに重要な集団として認められることが必要となる。実際に、所属することが求められている集団を、またその集団に所属する必要性を認識することができなければ、大人は自信を持ってしつけを行うことができないし、子どもはしつけられることを納得することができないのである。

さて、それでは、現在の子どもたちにはどのような集団のメンバーとなることが求められているのだろうか。また私たち大人は、子どもがメンバーとなっていくべき具体的な集団や社会を明確に描くことができているのだろうか。この点について明確な回答を示すことができないところにしつけを難しくしている大きな要因がある。

この集団の存在という観点からしつけの担い手や内容の変化をみると、社会的な移動が少ない前近代の社会においては、子どもにとって重要な集団は、現在も未来も生活する場となる地域共同体と、生き残っていくために必要な労働の場を提供してくれる家族であった。また家族が行うしつけは「労働のしつけ」であったが、広田が示しているように、家族は基本的な生活習慣の形成や行儀作法といった非労働部分のしつけにはほとんど注意を払っていなかったのに対し、家の存続にストレートに関わる労働のしつけは非常に厳しいものであった（広田 1999, 31-32頁）。伝統的家族は、家族が様々な代替不可能な機能を担っていることを前提に、その集団を維持していかなければならないという立場からしつけを行っていたのであり、現在の、子どもの第一次的社会化と成員の情緒的安定を果たすべき機能とする

家族とでは、同じ家族員が行うしつけではあってもしつけの意味するものは根本的に異なると考えられる。

また学校教育制度が定着し、家族員が直接に家業の伝授することがない雇用労働者が増加すると、子どもたちにとって重要な集団は学校へと変化する。学校が重要な集団となり得た理由は、生きていくための労働の場は学校を経由し学歴を取得することで獲得されるためであり、学校が予期的社会化の装置として有効に作動したからである。ここでしつけの目標は、予期的社会化の場である学校生活をいかに上手に過ごしていくか、また学校的価値をいかに身につけるかに変化するが、この価値取得の過程はまさにしつけ過程であり、子どもたちが学校という集団のメンバーになっていく過程である。また学校的価値を身につけ学校集団のメンバーとなることは、その後に行っている労働生活や家庭生活を円滑に進めていくことにつながったのである。

ここで、少し調査データを見ておこう。表1から表3は、文部省が行った「平成6年度学校教育と卒業後の進路に関する調査報告書」の中のデータの一部であるが、学校と企業の連結に必要な教育内容がどのようなものであるかをこれらのデータは示している（6）。まず表1は、高等学校を卒業して企業に就職し2年経った者に「社内教育の内容について希望する事柄」を尋ねたものである。1位と2位には業務に関する知識や技術の習得があがっているが、3位には「礼儀作法」がきており、若い企業就職者は専門知識や基本的知識に次いで、職場に適應していくために必要な、いわばしつけとして身につけるべき内容を学びたいと考えている。この学びたいという希望は、その内容が職業生活を行っていく上で重要であると認識されていることを意味しており、しつけの内容は、職場集団に適應し、円滑に仕事を行っていく上で必要な行動パターンであることをこのデータから確認することができる。

表1 就職者が社内教育の内容について希望する事柄（就職者調査）

業務に関する専門知識・技術の習得	24.9%
会社の組織や業務などに関する基本的知識	15.7
礼儀作法（応対の仕方、電話のかけ方、手紙の書き方など）	15.0
社会人としての一般教養	9.8
資格の取得	9.2
社会人としての心構え	8.0
OA機器の取り扱い方	4.3
語学力の向上	1.7

次に表2は、企業に対して「今後の学校教育に期待するもの」を尋ねた結果であるが、1位には「基礎的な学力や一般教養」という知育の面の充実があがっている。しかし企業が学校教育に求めているものは、やはり知識や技術だけではなく、3位には、変化への対応能力や専門的知識の獲得を押さえて、「社会人にふさわしい言葉遣いや礼儀」というしつけ内容があがっている。この結果は、企業は学校をしつけを行う場としてとらえていることを示しているといえよう。若い企業就職者が職業生活を行っていく上で必要でありこれから社内教育によって身につけたいと考えている「礼儀作法」を、企業は学校教育の場で身につけることとして期待している。

表2 企業が今後の学校教育に期待する事柄（企業調査）

基礎的な学力や一般教養を身につけるための教育	40.5%
勤労観や職業観	28.5
社会人にふさわしい言葉遣いや礼儀	20.6
技術革新等社会の変化・状況の変化に柔軟に対応する能力	6.5
専門教育や技術教育	3.9

これらの結果は、表3でも確認することができる。表3は企業に対しては「新規学卒者（高等学校卒業生）を採用する際に重視する事柄」を、また就職者には「職業生活でもとめられていると思う事柄」をそれぞれ尋ねた結果ある。「周囲の人々と良い人間関係を築くこと」や「社会人にふさわしい言葉遣いや礼儀」といったしつけや、集団や社会のメンバーになるという「社会化」の内容が上位にきており、集団生活を行う上でしつけが必要とされていることがわかる。

**表3 <企業>新規学卒者（高等学校卒業生）を採用する際に重視する事柄（企業調査）
/<就職者>職業生活でもとめられていると思う事柄（就職者調査）**

	企 業	就 職 者
基礎的な学力や一般教養	57.0%	12.4%
自主性・積極性	52.5	30.9
周囲の人々と良い人間関係を築くこと	50.8	44.4
責任感	44.5	32.6*
社会人にふさわしい言葉遣いや礼儀	30.6	25.8
忍耐力（*2）	18.3	
専門的な知識、技術や技能	6.9	22.7
これまでの考え方にとられない創造性や先見性	5.6	6.1
個性	4.5	
資格を持っていること	3.4	
リーダーシップ	1.8	1.9
出身学校	1.8	
国際感覚	0.2	0.9
ボランティア歴	0.2	
情報の収集やこれに基づく適切な判断力		8.6

（企業調査は複数回答で3つまで回答可。就職者調査は複数回答で2つまで回答可。）

* 1責任感と忍耐力（*2）を合計した数値（仕事に責任を持って忍耐力強く取り組むこと）

以上の結果は、学校は知識や技術習得だけでなくしつけを意味する教育内容を子どもに提供していること、同時に職場は学校に知識や技能の面だけでなくしつけ面の教育を期待しているし、学校で行われるしつけは実際の職業現場で必要とされていることを示している。つまり、ここで確認したいことは、集団（職場）がしつけを必要とし、また集団（学校）がしつけを行うことができる、というしつけと集団の関係なのである。

しかし現在、学校では様々な問題が生じ、また高度経済成長期に拡大した学歴取得の魅力が安定経済期に入って減じるなど、親は学校への信頼を失いつつあるといえる。この親の学校への信頼の喪失は、子どもにとっては家族を除けば唯一の所属集団ともいえる学校を失うことを意味するともいえる。そしてまた、学校が媒介となって集団の持つ価値を伝えていた労働の場という集団との関係を失うことにもつながっていく。しつけが具体的な集団の存在を前提としていると考えるのなら、この子どもにとっての集団の喪失はしつけを行うことを非常に困難にする。社会化が子どもを集団のメンバーに変えていく作用である限り、メンバーとなるべき集団が何であるのか、またその集団がメンバーとなるために何を必要としているのかがわからなければしつけは成り立たない。

家族が行ってきたしつけも、それぞれの家族が独自の内容をしつけとして行ってきたのではなく、学校生活を円滑に行うことを子どもに目標とさせることによって、学校が提示する価値の伝達という形で行われてきたのが現実である。また雇用労働者にとって学校が予期的社会化の重要な装置である以上、学校を媒介にする形で家族は労働の場が必要とするしつけを行うことになる。従って、しつけを行う家族にとって、学校はしつけの内容を伝達する重要な存在であり、学校への不信は、学校と労働の場と二つの重要な集団を距離あ

るものにすることを意味している。つまり、家族の学校への不信は、しつけによって適応することとメンバーになることが求められる集団を消してしまうのである。大人は、集団が見えなくなってきたことによって、実際に何をしつけとして行ったらよいかはわからなくなってきたし、子どもたちは、所属すべき集団が大人から提示されないためにしつけられないことに不自由や罪悪感を抱くことがなくなってきたのではないだろうか。

（２）アクセス・ポイントでの出会い

これまで、現在のしつけをめぐる問題状況を解明していくためには、しつけを行う力が家族にある、あるいはないといった観点での議論ではなく、家族がしつけを行うことが難しくなっている要因を明確にすることが重要であるということを示してきた。また、しつけの困難を探っていくために必要な視点として、「私たちにとって重要な集団とは何か」という点をあげた。すなわち、しつけを充分に行い得ていないという感覚や不安感を形成している要因は、これまで述べてきたような家族の構造や教育理念の変化にあったといえるが、さらに重要な点は、しつけ内容を提示する集団を子どもたちに示していない点にある、ということである。

社会集団が成立するためには、集団成員による継続的な相互作用、共同の集団目標の設定と協働、規範の制定による成員規制、地位と役割の分化、一体的なわれわれ感情に基づく成員連帯、といった要件が満たされる必要がある。しつけによって子どもたちはこうした要件を備えた集団の一員となっていくわけであるが、その結果子どもたちは、社会的な目標や役割、他者とのつながりの実感を獲得し、獲得した目標や役割を基礎に、新たな個性や能力を引き出していくのである。この５つの要件を満たす集団を子どもたちが獲得していくことは、社会にとってもまた子どもに

とってやはり非常に重要なことである。この集団を私たちは現代の子どもにどのような形で示していくことができるのだろうか。

そこで再度ギデنزの主張に注目しておきたい。ギデنزは近代社会の特徴として、抽象的システムの発達とそれへの信頼をあげている。抽象的システムの発達は、先にも述べたが、生活空間と時間を飛躍的に拡大させた。この時空間の拡大は、抽象的システムへの信頼、特に専門家への信頼を前提としている。なぜ飛行機が飛ぶのかという原理はわからないが、ほとんど何も疑うことなく旅客機を利用できるのは、根底に「顔の見えない人」である専門家への信頼が存在しているからである。このように私たちの住む世界は拡大しているがゆえに、以前のように全てが見える状態ではなくなっている。現在問題としている集団の喪失も、抽象的システムの発達による時空間の拡大によって生じた必然的な結果なのかもしれない。

しかしギデنزは、アクセス・ポイントというものを示している。抽象的システムに対する信頼は、多くの場合そうしたシステムに責任を負う人間や集団との出会いを必要としている。このシステムに責任を負う人間や集団との出会いのことを、ギデنزが抽象的システムへのアクセス・ポイントと呼び、抽象的システムが信頼を維持していくための方法の一つとして示している (Giddens 訳書 1993, 106-107頁)。このアクセス・ポイントは「顔の見えるコミットメント」と「顔の見えないコミットメント」が交わる場で、専門家やその代理人とのアクセス・ポイントでの出会いは、抽象的システムを運用する人が生身の人間であることを確認させ、抽象的システムへの信頼を維持していくことを可能にする重要なポイントとなるのである。

集団の喪失という状況は、ギデنزの議論の中では抽象的システムへの信頼の喪失と読みかえることができよう。そのように考える

ならば、アクセス・ポイントでの専門家との出会いによって集団は再度獲得されていくと考えることも可能である。現在の子どもにとって、必要とされるアクセス・ポイントでの出会いとは実際どのようなことを意味するのか、そこでどのような専門家が登場してくる必要があるのか、また誰がその出会いを準備できるのか、など明確にしていかなければならない点は多々あるが、何のためにしつけを行うのか、という原点に戻ってみるならば、このアクセス・ポイントでの出会いを準備することは重要な事柄となっていくのではないだろうか。

子どもたちが様々な集団に所属することの重要性はしつけとの関連でこれまでも指摘されてきたが、そこで示された集団の具体的な形は、「異年齢集団で遊ぶ機会を作ろう」や「ボランティア活動を活発に行おう」といったレベルの集団である。しかし現在子どもたち必要としている集団とは、何のためにしつけを行うのか、といった疑問に対応する集団なのである。つまり、継続的な相互作用と規範を備え、集団目標の達成のために地位と役割が分化した、すなわち「社会」そのものを子どもたちは必要としている。その獲得方法はアクセス・ポイントでの専門家との顔の見える出会いであるのか、あるいは別な方法なのかもしれないが、社会を具体的に感じる場を用意することによって、はじめてしつけは可能になると考えられるのである。

<注>

- (1) この答申の中間報告は1998年3月に発表され、新聞にも内容が掲載されたが、毎日新聞は、この内容に対する親の反応を「どうすればいいの?」これは「理想」だ親たちに戸惑いも」という見出しとともに、「『こうした方が良い』とは書かれていても『どうすれば実現できるか』がない。『本を読み聞かせて』なんて昔から言われており、親はウンザリ」、「これは『理想』だと思う。実現のための努力を、いつだれが始められるのか」として紹介している(毎日新聞、1998年4月1日朝刊)。
- (2) その後文部省はこの答申を受けて、乳幼児期からの家庭教育やしつけのあり方をわかりやすく解説した『家庭教育手帳』と『家庭教育ノート』をあわせて約1,800万部作成し1999年4月から妊産婦や中学生までの子どもを持つ親に配布し、家族の持つ教育機能の回復と強化を行っている。
- (3) 「平成7年度国民生活選好度調査」では「社会の基本的な礼儀や道徳を身につけていない子供や青少年が増えていると思いますか」という質問をしているが、全体の約9割が肯定している(「そう思う」が56.7%、「まあまあそう思う」が30.9%)。また「昔に比べて子供のしつけが難しくなっているといわれるのはどうしてだと思いますか」という質問に対しては、1位が「教育が知育偏重になったため(26.1%)」、2位が「生活が豊かになったため(20.2%)」であるが、3位と4位には「親の権威が落ちたから(20.1%)」、「兄弟姉妹が教えあうことが少ない(13.0%)」がきており、家庭教育の教育力を問題とする認識が強く見られる(経済企画庁1993,147頁)。また総理府「親の意識に関する世論調査(平成4年)」

によると、「青少年の非行などの問題行動は、どこに原因があると思いますか」という質問では「主として家庭」が39.9%で最も多い(経済企画庁1996,27頁)。

- (4) ギデنزズは抽象的システムへの信頼を具体的に次のような形で説明する。私たちは旅客機に乗り長距離を短時間に移動できるようになった。乗客はなぜ旅客機が飛ぶのか、またなぜ安全性が確保されているのかといったことについてほとんど何の知識を持っていないが、実際にその旅客機は定刻どおりに無事に目的地に到着することに確信を持っている。こうした確信は、抽象的システムへの信頼が生み出すことなのである(Giddens訳書1993,140-141頁)。
- (5) 加藤裕子はギデنزズの関係論の示す家族関係の形成や維持の困難性を用いて現代の少子化問題を考察している。
- (6) この調査は、高等学校における進路指導および職業準備教育について、実態を把握すること、また在学者と卒業者の意識、また企業が学校教育に期待していることを明らかにし、学校教育と産業社会との接続を円滑にするための基礎資料を得ることを目的としている。調査は学校調査(公・私立の高等学校対象)、在学者調査(公・私立の高等学校の全日制三年生対象)、卒業生調査(平成4年3月に公・私立の全日制高等学校を卒業した者対象)、企業調査、の4種が行われた。

<参考・引用文献>

- Giddens,Anthony 1990, The Consequences of Modernity. 松尾精文・小幡正敏訳『近代とはいかなる時代か?』而立社 1993.
- 濱嶋朗他編 1997, 『社会学小辞典(新版)』有斐閣.
- 広田照幸 1999, 『日本人のしつけは衰退

したか』講談社．

加藤裕子 1999, 「現代「子育て」観と少子化 - 関係論的観点からの考察 - 」関東社会学会『年報社会学論集』第12号, 14-25

頁．経済企画庁編 1993, 『平成5年版国民生活白書』大蔵省印刷局．

経済企画庁編 1996, 『平成7年度国民生活選好度調査』大蔵省印刷局．

文部省中央教育審議会 1998, 『新しい時代を拓く心を育てるために 次世代を育てる心を失う危機 (答申)』．

文部省大臣官房調査統計企画課 1996, 『平成6年度学校教育と卒業後の進路に関する調査報告書』大蔵省印刷局．

森岡清美・望月嵩共著 1997, 『新しい家族社会学 四訂版』培風館．

柴野昌山 1989 a, 「しつけの構図」柴野昌山編『しつけの社会学』世界思想社, 3-32頁．

柴野昌山 1989 b, 「幼児教育のイデオロギーと相互作用」柴野昌山編『しつけの社会学』世界思想社, 33-66頁．

山田昌弘 1997, 「援助を惜しまない親たち」宮本みち子・岩下真珠・山田昌弘『未婚化社会の親子関係』有斐閣, 73-96頁．

山村賢明 1986, 「しつけ」日本教育社会学会編『新教育社会学辞典』東洋館出版社, 352-353頁．